

2025年1月25日、名前のない星戯曲賞、最終選考会が行われました。審査員の皆様、お疲れ様でした。皆様の積極的かつ愛に溢れた議論により、近年稀にみる、高いレベルの戯曲賞の選考会になりました。

ご応募いただいた皆様、ありがとうございました。司会を務めました都合上、言及しきれなかった部分もあるかと思えます。また、テキストがあったほうが今後参照しやすいというメリットもあると思えますので、選考会前に最終選考に残りました8作について私が書いた評(一部加筆修正)を掲載します。このテキストが皆様の今後の糧となることを願います。

神田真直 (Nakayubi.)

雨をぜんぶ飲んだら砂漠にならない

ト書きが少なく、戯曲としては客観性に欠けており、悪くいえば、内輪すぎる印象がある。しかし、新聞を通じた世界との交錯があって、その登場人物たちとその出来事との距離感に絶妙な現実味があった。舞台上で何をどう転がすのか、ト書きでもっと明示されていれば、もっと高い評価を与えたい。例えば冒頭のシーンからして、どのような姿勢で人物たちがそこにいるのかわからない。そのことによって「客観性の欠如」が悪目立ちしている。「主観性」と「客観性」のバランスをどうとるのは作家によって自由であり、いずれかに偏っているからといって即ダメな戯曲になるわけではない。しかし、この戯曲の場合は、いきなり会話のセリフから入ってしまい、読み手に不親切という印象ではじまってしまう。その印象を、最後まで引きずってしまい、後半の主題的場面の魅力が半減してしまった。後半における詩的な語りの部分の魅力が、しかし、とにかく圧倒的に惹きつけるものがあり、それが多くの審査員の心をつかんで離さなかったのだと思う。

宇宙家族

「火星」というざらしを行うことで、「どこでもない場所」と受け手は了解する。その一方で、共感しやすい家族のモチーフにあふれていて、結末も明るく、親しみが持てる。

「火星」の表現について、主にセリフにおける説明過多の感がある。よしおの動作を説明しすぎてしまうことは、考え方によっては、演出、俳優、観客から解釈を強引に奪うことになるといってしまうからである。もちろん、このあからさまさは意図したことであるのだろうけれども、最後に火星の被り物が残る場面をより魅力的に感じさせるためにも、火星のしゃべりは引くべきだと思う。

上記の点を除いては、全体を通して人物たちの交錯や葛藤が過不足なく描かれていた。くしゃみ、ナゴヤ弁も、「コミュニケーションの不全と解消」というテーマに即していて、よい機能を果たしていたと思う。

エゴイズムでつくる本当の弟

はじめと終わりが「ピザ」と「団欒」でつながっていて、非常にわかりやすい構成であり、ヒューマニズムに溢れるドラマである。しかし、これは一方で諸刃の剣であることを言及しておきたい。わかりやすい構成なだけに、「こうしたほうがいいのでは？」という野暮な提案がいたるところで出てきてしまうところ、そして、おそらく作家自身が「優しすぎるために」、笑いの作為が弱くなってしまおうという点である。

間違えて雪子が猫の餌を食べてしまう場面は、予測がつく展開で、笑いとしての機能が弱く、その後に続く真剣な場面との抑揚が小さくなっているとか、夢子の立ち回りが猫を俳優として存在させるには観客の視線を動かす以上の役割を果たしていないように思える点や、23 頁で、二人のユウスケのなかの一方が出てきて、「(愛想笑いしながら・・・など)」のセリフでは、もう少し表現にこだわるべきであるとか、減点法で見ってしまうとそのように感じてしまう場面が多く感じる。

また、今述べた点と重なるところもあるが、笑いの機能が弱い点について付言しておきたい。この弱さは、主人公悠介≡ユウスケの葛藤が原因であることが、物語が進むにつれてじわじわわわかってくる。セリフにある「笑えない」とか、「これを物語にしているのか」という戸惑いがあるのだが、悠介とユウスケの葛藤とその結果としてのラストシーンを印象的にしたいのであれば、もっと作為を働かせておく必要があるように思う。題材に対して、真摯に向き合いつぎているといえるのかもしれない。

ただし、茂雄の浮気を問い詰める場面や 32 頁の卓球で空振りしつづける場面、そしてあの北海道のことば、最後にも出てくる「別になんも」のような、「方言」や「地域語」というには強くない、しかし、生き活きとしていないわけでもないという特異なバランスの言葉遣いが、作品のなかでの年長者のセリフに含まれていることは、印象的であった。

さらに、「形式」という点でいえば、演出上の指示（平台が～など）を、戯曲での表現において必要性にかられてのものに留まり、ひろがりがなく、活かしきれていないという面もある。これは好みの問題になってしまうが、もっと舞台上で起きていることについて、書き込むか、余白を残すか、いずれかに振ってほしい。また、セリフも含めて、やや説明的すぎる箇所があり、戯曲賞の審査員としては、俳優と演出家あるいは読者を信用してほしいとも思った。

タイトルは全候補作のなかで、最も優れたものである。簡単な言葉で、わかるようなわか

らないような、しかし、中身が気になる。比較的文字数は多いが、言葉にして言いたくなるような効果がある。また、戯曲のテーマもしっかりと抑えているので、Youtube のサムネのような釣りなわけでもない。この真摯さと、語感のバランスは高く評価すべきである。なんて読めばいいかわからない(担当者ですら間違えていた)、テーマも見えにくい、拙作『京の園』なんかよりずっといい。

首の皮一枚

24 頁(※)に象徴されるような、やや翻訳文体調の言葉遣いがこの戯曲全体の違和感を表現している。筋だけ追っていくと、実に親近感を抱ける人間模様なのだが、この戯曲に出てくる〈宗教〉の手触りがずっと気持ちが悪い。しかしこの気持ちの悪さを忘れそうになってしまうようなドラマが②の後半で起き、そして救急車を呼ぶなどの行動が普通の人間に見える。しかし、東のメシアとか西のメシアとかに対して、疑念の余地をぬぐい切れないままなので、今自分は何を見ているのかよくわからなくなる。これはいい意味での緊迫感で、会話だけで、最後までこれが続けているというのは驚くべき技巧である。

また家族の物理的な「外側」を描かないことで、空間の密度が高くなっている。これによって読み進めるごとに、受け手に迫るような感覚に陥った。戯曲としては、もう少しト書きによる描写も欲しかったところだが、戯曲全体の構造の技巧に唸った。

小学生の頃、仲の良かった同級生が、ある新興宗教の二世で週末にはまじめに布教活動をしていた。彼は小学一年生の時点から、校歌は歌っても、「君が代」斉唱のときに立たなかった。しかし、この戯曲を読んで思う、彼には私がこの戯曲で描かれている世界にいるように見えていたのではないか。私たちだって、この戯曲で書かれている世界のなかに住んでいるのではないか。ともすればこの戯曲の世界に自分も引き込まれそうになる。

はじめ、息子のタカが「覚醒している側」「こちら側」の人間でその葛藤を描くというようなありきたりな筋を想像した。しかし、決してそんなことはなく、「信仰の篤さ」だけで人物が描き分けられており、そして事件を通じて、それが変化する、ということで劇が展開される。ともすればこの戯曲の世界に自分も引き込まれそうになる。

ただし、実際に声に出して読んでみる(100分程度)と、全体的に冗長すぎるようにも感じた。会話がとにかく長い。もちろん、かなり調律したのかもしれないのだが、「ミラクル」とか新興宗教独特のワードチョイスでもう少し遊ぶことで、会話に彩りを持たせることができたような気がする。もちろん、これは、一見すると日常会話の劇であるということによる緊迫感に私が耐えられなかっただけというのかもしれない。俳優と演出家も力量が試される。

またルナとコウの会話からコウのモノローグ(前説)での幕切れについてだが、別のセリフで切るほうが効果的のような印象もある。「半年前、私達家族に或る事件が起きました。あの日、私は実の娘を」(62頁)と言われても、私たちは劇でそれを完全に見ているため、

いいヒキになりきれではないと思う。もちろん、ルナとコウのやりとりで幕切れを実行するのはベストな選択である。これだけ緊迫感を持続し続けたので、幕切れに非常に大きな期待感を持ってしまったが、その期待に見合う幕切れだったとは思えない。

※ ルナ パパ！

コウ ルナ。おお、ルナ、わが愛しい娘。

ルナ 何だか待ちきれなくて、こんなに早く来ちゃった

浮遊感

この戯曲を読んで、別役実を想起しない者はいないだろう。物が浮いているという幕開き、魚肉ソーセージを食べる女1、この種の演劇にある程度慣れた手つきを感じ取ることができる。ただ、私は別役『受付』に対しても同じようなことを繰り返し言っているのだが、「浮遊感」というタイトルと「浮遊病」という言葉に頼りすぎている点と、はじめのセットアップで「物が浮いている」という表現から動きがあまりにないという点にネガティブな印象を持ってしまった。「物が浮いている」という印象的な冒頭から何を動かすのか期待してしまうのだが、4 場であっさり別の場所が変わるところにも、惜しさを覚える。また、マグリッド『ゴルコンダ』が飾ってあること、そしてマグリッド事典からの引用が出てきってしまうというところで、この作品のオリジナリティがどこにあるのかも見えにくくなってしまっている。

さらに、今回は一般にあまり言及しないことにしてはいたのだが、句点読点の使い方や、誤字脱字と思しき箇所が散見されるためなのか、「文体」が独自のものなのか、粗さなのか区別がつきにくい。例えば、15 頁のラジオから流れる「現在、変則的に大雨が降ってみますので傘は必須です」のなかの、「降ってみますので」というのが誤字なのか、あえての表現なのか、いずれも信じて読むことができないという状態がある。これは問題というほどのことではない。解決策が明確な「課題」とでもいえる部分である。もちろん、誤字脱字なしでの提出が必須とは思わないし、自分自身人のことを言えた状況ではないのだが、語感・リズム感を意識したくなるようなテキストの性格上、もう少し気を配るべきなのではと思ってしまった。

雪の雫

「幸村」と「雪音」には、読み方の指定がないが、おそらく、「ゆきむら」と「ゆきね」で、やや混同しかけるところがある。もう少し音感を離しておくべきだっただろう。主に、雪音、栞、唯花の三名で、話が展開する。とてもわかりやすい流れの悲劇である。この舞台をどう演出すればいいのか、途中から明確なイメージを持ちながら読むことができたが、ひろく一般には難しいかもしれない。しかし、ト書きがなくても、本作を味わうことは可能であり、それだけ迫るものがある。その理由はおそらく会話の鮮やかさだろう。必要十分な最低限のセリフで状況と心情がバランスよく書かれてあるために、ト書きがなくても飲み込みやすい。だからこそ、陰と陽の、構成における抑揚といった、技巧を使って、もっと効果的に表現することで、主題に受け手を惹きつけてほしい。

ランジェリーナ

笑いの作り方や構成においてかなり大味なところがあるが、「感情のレベルで共感しえないものを、理解しようとする」という作品の主題が、分断極まるこの時代においてたいへん重要なのではないかと思わせた。昨今は、自分と敵対する者は完全に洗脳されているか、バカかどちらかだと決め込んでいるという雰囲気が蔓延しているが、真名はそういう時代に抵抗しているように見える。もちろん、夫婦は一般に様々な事情があって、容易に離別の選択をとることはできない。しかし、それは社会に拡張しても同じことである。結局、人々はどうあっても理解しあえない人間と共存を図らねばならない。一見して、すべてが悪ふざけに思えるのだが、だんだん真面目に読んだほうがいいのではないかと思わせてくる、怪作である。

ただし、はじめに指摘した戯曲の技巧上、もっと詰められたのではないか、あるいは俳優や小劇場の雰囲気に依存していないか、という疑念も拭い去れない。後半は楽しく読めるのだが、前半に今述べたような部分が多く、そこにネガティブな印象を持った。例えば、10頁の紺と真名の会話での「落ち込んでるが二度でましたけど」、15頁と33頁の真名とあとの会話での「獣とビースト」、「ブドウ糖」の件などは、非常に限定的な場でしか受け入れられないように感じる。また屋上でのセリンと紺の会話は、6ページにわたっていて、サイドストーリーの一場面としてはやや冗長である。占い師、紺のはじめの扱いが、唐突なところはここまで述べた点を除いては、まだ受け入れられる。

また、真名と通の馴れ初めについてほとんど言及がない点は大きな問題として指摘できる。多くの者が気になるころなのに、最初から最後まで一貫して書かれていない。これは想像力で補うのではなく、言及しておかなければ、この二人のどちらにも共感することが難しくなる。どうしてこの二人がここまでお互い理解し、共存しようとすることに真剣なのか、よくわからないからである。

夢見る浴槽

人魚という象徴が何を示すのか、いろんなことを考えながら最後まで読んでしまう。ただ、冒頭で「幻想的な」とト書きで書いてしまった点はいただけない。同様のト書きが『エゴイズムでつくる本当の弟』にもあった。ただし、少なくともこちらの作者は「幻想的」という言葉に対してしっかりと責任を果たしている。そのあとに、具体的にどのような幕開きなのかをト書きに書いているからである。いい意味で、わかるようですべてはわからない表現であった。

高校の女子寮で言葉は現代風なので、一般的な名前が出てくるように思えるが、人物の名前は少し変わっている。人物の名前、レモン、ホワイト、ナイーヴといった名前には当然、何らかの意図があったのかもしれないのだが、セリフで並んだときの詩的バランスがあまりよいとは感じられなかった。

セリフに関して、10 頁の人魚と牛乳の会話はよいバランスで、人魚というものの存在をかなり抽象的なものとして受け取ることができる。しかし、14 頁での人魚とホワイトの会話になると、具体的な、大学とか、社会とか、奨学金とか言い出す。ここで、人魚の意味するものがもっと多様なものとしてとらえられるか、バランスを欠いた理解不可能なものとしてとらえられるのか、という分かれ目ができてしまう。この人魚のセリフを、私はあまりポジティブに読むことができなかった。

今回私が読んだ全候補作のなかでは、ト書きにおける「説明」と「表現」のバランスが最もとれていると思った。今回の戯曲賞に限らず、昨今の戯曲は、ト書きの面白さに気が付いていないものが散見される。これは、劇作家が演出を「兼ねざるを得ない」という状況もあるのかもしれない。しかし、「説明」(＝客観性)と「表現」(＝主観性)の折り合いをどうつけているのか、ということには劇作家の表現への意識が如実に表れる。つまり、「読ませる」気があるのか、あるいは「読み込ませる」気があるのかということなのだが、自戒も込めて言うが、「稽古で足りればそれでいい」ととどまらないこだわりを見せてほしい。

また、これも審査には関係ないことかもしれないが、この作者には、あと 10 ページ以上は長い、構成を考えざるをえないものを書いてみてほしい。別役の初期戯曲のように、どのようにして自分の世界観を長い時間、維持できるかということに挑戦すると、より表現に広がりや強度が出てくると思う。